痴語集

RYUGEN

人間が生きてゐる限り何等かの形式によつて憬れを持つものだ、よしそれが貴賤貧富智識の有無に係らず何等かの憬れを持つてゐるのだ、然しその憬れを持つてゐる事が生ける人間に取つては最も尊い事なのだ。

曰く、財、位、名譽、女、酒、美食、衣住又は精神的安樂等これなり、この他その求めんとする物一個の主觀によつて決する能はず。

是に財を求むる人あり、彼は日夜仔々として努め、如何なる物をも犧牲にして財を求むるなり、されど彼は未だ彼自身を犧牲の壇上に揚げし事を知らず、哀れむべきなり、今彼は何の爲に財を求む、自己の爲ならずや、然りとせば己に犧牲に供して無き我を何處に求めてその功を喜ばんか彼は遂に財の爲に社會を離れ、自己を失ひ、財を求めて財に身を與へたり。

位を求むる者あり、名譽に憬るゝ人あり、彼は既に有形的の欲望を果し、更に愚に進みて無形の望を持つ又宣べなりとせんや、彼のそを求むるは多大なる物質の犧牲を要するなり、若しそれ所謂自己半生の膏血の財か又は父祖の汗と犧牲の財なり、前者は自己を滅却して得たる財を既になき自己の爲に位、名を求むる、逆者の所作に非ずして何ぞ、彼は遂に愚なればなり。

後者は如何に、彼は父祖の肉を市に露し而して愚なる自己のヴエールとして位、名を求む、彼も遂に救濟す能はざる痴者なり、此等の三者は憧れの爲に敢へて求め遂に我を失ひし前車の誡なるべし。

是酒を求むる者あり、女色に憬るゝ人あり、

彼は遂に自己の人間たるを覺らず、本能の叫びに應じて自制を知らざる人面の下等動物なり、彼について又何ぞ賢愚を論ぜんや、彼は人として數ふる能はざるなり。

美衣食住に憧るる人あり、彼は人生の第二の目的のみを知つて第一義を失せり、全べての事皆この三者に落著すかの感なきにあらざれども、そは根本的誤解より生ぜり、かゝる半智半解の人を稱して猿人とや云はん、彼又論ずるに足らず、唯存在人として見るべし。

是に精神の寂光土を求むる者あり、これ蓋し人か、それ世に暇なき故をもつて精神の修養を捨て宗教の溫皮膚に接せずしてその日を送迎する者あり。

知らず彼に、睡眠、食時、喫煙、步行、遊戯の暇なきやを、彼は遂に人間より離れん事に努めて人に接近せんとする事を回避す、彼も又人ならず。

人は常に高大なる理想とそれに對する憧れを持つ事を要す、そは人の生存價値の第一義ならずや、精神的理想は世人の架空事の如く思へる事なり、これ又世人の目なきより生ずる誤りなり。

若人の胸に躍る血汐は墓場に我を送る太鼓の音にあらずや、若し我これを知らば我は物質に憧れを持つ心に變置するに佛陀の寂光土をもつてすなり、この感を抱く人これ眞人に近かゝらん。

◇

今是に男女二人の情死せんとするものあり。先づ女は自己の苦しさを形容するに死に勝る苦みなりと用語す、彼女の眞意は死を希ふに非ず唯その苦しさを死の語によつて表明せんとするにあり、男はその女の心に厚く同情し、然らば共に死せんと誘ふ女はその心に感謝すれど必ずしも共鳴せずさりとて先に發言せし言の責任感に迫られ遂に死を決せんとす、さりとて兩者共に眞に死を希念するに非ず唯行係り上にかくなりたる物なれば將に死の水に身を投ぐる瞬間まで尙生を希念し、その水の淺くして命の自然的

救濟をひそかに祈れり、時に兩者は生き、時に死す、これ彼等の運命なりと雖も一つは我が言語に於て死に對當の意を表す語なきが爲に思ひ設けぬ命を我友は捨てぬ。

◇

判官は靜かに立上り而して被告に問ふて曰く汝何が故に彼を殺せしや、と。被告答へて曰く我は彼を殺すの意毫少もなし、されど今彼我が爲に命を落せしとすれば哀れ彼は遂に犬死なり何故なれば我に殺意なきに彼は死す、これ我が罪にあらず又彼の罪にもあらず、唯我の用ひし斧とその斧を作りし社會の罪なり勿論斧はかくなさしめんが爲に作られしにはあらざれど若しあの斧なかりせば、我も殺人の罪を被らず彼も又貴重なる生命を失ひしにはあらざるべし故に罪科の趣く所なし、これ彼の犬死の譯なり、と答へて判官にその次に起るべき審問を要求するが如くに視線を注ぐ。

◇

A、古人は何故太陽の登る方向を東と言ふのだ

B、それには別に理由はない日加紫で日の登る時に紫雲棚引くからさ。

A、何か言海にでもあつたのか？

B、いや言海にはどうあるかは知らんが俺の考へさ。誰が言ひだしたか知らんがそれも無意識の約束さ色の名と同じさ。別に理由はないよ。

A、理由のない物を何故東と名けた。

B、まるで雲水の樣な事を言ひ出したな、そんな事は萬物創造の神樣にでも聞いて來い。

A、では人間は譯分らずに言ふてゐるのだなあ

B、要するにさうさ、哲學科學あらゆるものがそうさ、善と言ふから善さ、一と言ふから一さその一なるものに根本的理由もないさ。又其處に換言すれば分らないと言ふ範圍が人間の領域さ又それで人の生活が出來るのだよ。

A、では君は人間は愚だとでも言ふのか。

B、人間に賢なる者があるか？ないよ人間は愚なればこそ生きて行けるのさ、若し眞に人が人間が分つたら生きる元氣がなくなるよ。

A、何故なくなる。

B、人間は決局何事も知らない。闇で而も暴風雨の時盲人が道を辿る様な物だよ、我と生への執着と言ふ一本の杖より他に人間には何もないからさ。

◇

或る雜誌の口繪に廿五年後のニューヨークと言ふ想像繪の寫眞がのせてあつた。

廿五年と云ふ年は何かよく架空的な計算によく用ひられる年である、人口倍加說等にも使用せられた、この年に想像せられる事は大抵當らない、人口論がよい例である、大ニューヨークの問題も又その想像が裏切られるであらう、あの雲に表れた、山の樣な天空に聳ゆる大厦高樓が果して構成されるであらうか、大都市に於ては一定の土地に於て上下に家屋の延長が企圖せられるのは當然の結論であるにしてもその畫家の想像してゐる樣に必ずしも上にのみ向つて延長されるであらうか、寧ろ危險率の小さい地下に向つて延長される事になるのではあるまいか

然し想像と言ふ事が初めから嘘の事である、嘘でなかつたなれば我々は敢へて想像するの必要はない現實に表れて來ないものを表れるであらうと想定して畫かれた畫であるから勿論架空事である、十分先の世界の運命が眞に分り得ない人間に取つてどうして廿五年と言ふ長い光陰の先の事件が想定し得やう、彼は嘘であると知りつゝ嘘に立脚して嘘を畫いてゐるのだ。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。